

設假小屋

也、

〔利家夜話下〕一伏見にて大地震之時、大納言様を孫四郎様の地震小屋にて御振舞被成候事之外、御小屋の結構なる様子を御覽被成候、御歸候て、岡田喜右衛門、齋藤刑部兩人を御使にて、被仰候は、地震小屋など申ものは、いかにも、輕々敷あやまち無之様に仕もの也、左様の儀は不入事也、むさと金銀費し、後には無理を申て、人の物がほしく成もの也、

〔享保集成絲綸錄二十九〕元祿十六未年十二月

今度地震、火事付て、屋敷或破損、或焼失之面々、普請之儀、此節者諸職人等可差支之間、急に仕儀無用段、雖爲御成道筋不苦之條、先板圍等申付置、勝手次第連々致造作様可相傳之旨、大目付及中間在合面々、江相模守達之、

〔愚聞當世雜話天ノ下〕大地震

同八日嘉永七年十一月市中伊豫下脇手の者共は、不殘追手へ假小屋建たるにより、三筋の町出來

し也、竹木、笞の類は、御作事より貸被下、横新町より向新町、惠美須町、下御旗、丸穗邊は龍光院山へ假小屋建、北町は杉山邊、上脇手之者は、一宮社内、大起寺の山内、野川所々へ假小屋建、日敷住居せしなり、自分之居屋敷に居たるは、御家中一圓と、笹町邊、延命寺前の邊より、僕松浦が居宅の近所

のみなり、略下

避難心得

〔震雷考説〕扱又逃出る時に至り、火鉢へ土瓶をかけ、焼火をしめすなどは古く言傳へて誰も知る處ながら、急速にしてゆきと、かすば、鎮りて後すみやかに手段すべし、途中に往か、り、又は逃出ての途中、總て遠く見渡すことなかれ、空をながめ地を見るべからず、動氣五臟にうつりて、氣血狂ふなり、只々近邊の建家長屋石垣等崩れ倒るとも、氣遣なき場所を見さだめ、是に眼をつけ、同じ所にイテ、あゆむが如く足を踏かへ、地氣のうつらざるやうにすべし